

明治初期東京大学医学生川俣四男也——その学生生活を中心に

川俣 昭 男

明治初期東京大学医学部卒業生動静について、先に新潟大学医学部小関恒雄氏が報告した⁽¹⁾。明治十六年の卒業生二十六名の中には、北里柴三郎、河本重次郎、隈川宗雄、大谷周庵、佐々木曠など、その後の医学界で功績をあげた人物が多く、伝記や回顧録が残されている。また最近佐々木曠⁽²⁾の東京大学時代の日記、講義ノートを閲覧することができた。本稿では、これらの資料をもとに同期生の一人、川俣四男也について、当時の学生生活を中心に紹介する。

家系

川俣四男也は安政五年十一月十四日、下野烏山（栃木県烏山町）で川俣誠の四男として生まれた。川俣家は代々烏山藩主大久保氏の侍医を務め、父誠（号は玄玠）は水戸で、華岡青洲、シーボルトに師事し徳川斉昭の侍医であった本間玄調（棗軒）の塾（自準亭）に入門し、漢蘭折衷医学を学んだ。玄調は既に「瘍科秘録」を世に出していたが、多忙であったため、誠が師に代わって門人達とその口

述記録をまとめ、補足編として「續瘍科秘録」を編集し⁽³⁾、更に「内科秘録」の巻末で、師の全著作をまとめ世に知らしめた⁽⁴⁾。この間、幕府から水戸竹隈の自宅に蟄居を命ぜられた藤田東湖の痔疾について、玄調の代診をしたという言い伝えがあり、東湖の書を本間家からもらっている。

嘉永年間、更に江戸で玄調の友人、大槻俊齋に種痘を学び水戸で普及させた後、シーボルトに師事した伊東玄朴の塾（象先堂）で蘭方医学を学んだ⁽⁵⁾。伊東玄朴および大槻俊齋等は、安政五年、江戸市中の蘭方医によびかけ、彼らを含めた総数八十三名が拠金し、神田お玉ヶ池に種痘所を設立し、大槻俊齋が初代頭取を務めた。これが東大医学部のルーツであり⁽⁶⁾、誠は当時の第一級の師に巡り会ったと言えよう。その後、安政元年から烏山で開業し、最後の藩主大久保忠順に仕えた。烏山藩は三万石ながら教育熱心な藩で、初代藩主大久保常春が、享保十二年に烏山藩学問所を設立した。この学問所は明治四年の廃藩置県まで百四十四年間続き、誠はこの督学（校

長)を務めた教育者でもあり、四男もここで漢学を学んだ。

外国語学習

維新当時、横浜は洋学のメッカで、外国人との接触を求め全国から士族の子弟が集まり、外国語習得に励んだ。誠は、西洋文明を吸収するために、明治二年長男(魁)を横浜に出し洋学修業をさせた。横浜には数々の外国語学校があった。高島嘉右衛門が福沢諭吉の協力を得て明治四年に設立した高島学校、幕末から神奈川奉行支配役の子弟の教育を目的に設置された修文館、その他多くの私塾、例えばヘボン塾(明治学院の前身)などがあった。高島学校には、岡倉天心、星亨、宮部金吾など後の著名人が多く在籍した^⑧。四男也は明治六年、長兄(魁)、次兄(敏)および三兄(英夫)と共に横浜に來た。兄達は高島学校でカスペルについてフランス語、英語を学び、英夫は更に修文館および東京英語学校(後の東京大学予備門)で英語を学んだ^⑨。四男也も外国語を学んだものと思われるが明らかではなく、英夫の履歴書によると、同年旧藩主(大久保忠順)に随従し東京へ移っている、その江戸上屋敷(現在の台東区小島)で、目と鼻の先にある東京医学校を目指し、下谷から本郷、神田界隈の私塾、私学でドイツ語を学んだものと思われる。

同級生の一人、河本重次郎は但馬豊岡より横浜に出て、高島学校でドイツ語を学んだ。

「此學校は町角にありて、二階造の細長き洋館であつた、其所に日本の先生では、岡本某と云ふ獨逸語の先生あり、又獨逸人ではカス

ペルと云ふ教師がゐた、余は初めて西洋人に面接するのであつて、彼れは、ぼうくたる髻を有して、驚様な目付であつたが、長椅子に足を伸ばして横臥していた。」医学に進むためではなく、普仏戦争でプロシアが勝つたので、ドイツ語を習えば役立つと考えたと「回顧録」^⑩で述懐している。カスペルはドイツ人であるが、英、独、仏語および数学、地理学を教えた^⑪。大谷周庵は、明治七年に下谷練堀町の春風舎と称する獨逸語の私塾を経て、東京外国語学校に入学し、専ら獨逸語を習得した^⑫。北里柴三郎は、医者になるためではなく、政治家、軍人になるためには外国語が必要と考え、熊本医学校に入った^⑬。二年以上級の森林太郎は本郷の進文学社でドイツ語、地理、歴史、算術、物理を学んでいる^⑭。東京医学校予科に入るには、数年のドイツ語の予備教育が必要とされた^⑮。同級生でこの学歴が判っているものは次の通りである。

- | | | |
|-------|--------|---------|
| 河本重次郎 | 横濱高島学校 | 東京外国語学校 |
| 大谷周庵 | 春風舎 | 東京外国語学校 |
| 池田陽一 | | 東京外国語学校 |
| 千原春甫 | | 東京外国語学校 |
| 真部於菟也 | | 東京外国語学校 |
| 鈴木規短次 | | 東京外国語学校 |
| 北里柴三郎 | | 熊本医学校 |
| 鶴崎平三郎 | | 長崎医学校 |
| 山根文策 | | 長崎医学校 |
| 浦島堅吉 | | 長崎医学校 |

を得た。今回は、今の東京醫科大學の舊時計臺下の室で、ランゲ Lange が學術の試験をなした、此時は一般の入學募集と云ふのでなく、何にか特別の廉を以て、余の外「略」四、五人丈の試験で、試験文はアレキサンデル・ホンボルドの Kosmos 中、南米紀行の一筋で、木の蔭が黒々と地上に影を投じて居ると云ふ句であつた。兎に角、之れで及第して、醫學の預備に入ることを得たのである。「略」余は北里、大谷、池田、鶴崎君杯と同級であつた。余が入學した頃は、寄宿舎に生活した」

明治七年九月、上京した佐々木曠の日記には入學までの試験の状況が詳細に書かれている(以下、一部抜粋 日記例図1)。

佐々木曠は安政五年一月一日、福井で生れた。代々福井藩のお匙医の家柄で、明治元年福井齋世館で蘭学を修め、福井藩より語学傳習生を命ぜられ福井明新館に入り、藩主松平慶永(春嶽)が大学南校教頭フルベッキに依頼し米國より招聘したグリフィスに就いて、ドイツ語並びに理化大意を学んだ。東京大學医学部卒業後、岐阜県医学校長、岐阜県病院長、岐阜県医師会長、私立岐阜病院長を歴任し、昭和十四年二月二十五日、同級生では最長寿の八十二才で没した。

明治七年

九月二十二日 全快十二時迄東校行入学願書納ム

十一月二日 晴 八時東校行 學術検査ヲ受ク 検査科目 日本外

史、輿地史略 作文治験ヲ記シ以医薬請文題 十時

相済

十一月五日 雨 東校ヨリ体格検査ノ差紙来

十一月六日 晴 東校行 ミュルレル氏自ラ檢 午後直ニホフマ

ン氏 胸郭ノ広狭気度ヲ檢シ後 胸前后ニ打診

十一月十二日 晴 雨 東校行 独乙文法 詞活音 筆算 ^マフイソク

氏 独ホルツ氏 算一時過済

十一月十九日 晴 東校ヨリ差紙来 入校差許シニ相成候条 明廿

日 證人同道參校アルヘシト

十一月廿日 晴 東校行監事局へ行 證書ヲ出シ 六番舎四番室部

屋ヲ取

十一月廿一日 晴 午後一時 東京医学校六番舎四番室入荷物皆ニ

人力車ニ載運ブ

十一月廿四日 曇 火曜日初メテ六番教場ニ於テホルツ氏ヨリ新

入六番舎生百十七名ノ受業

入学試験は明治七年後半に逐次受け、科目は學術試験(歴史、地理、算術)、ドイツ語(文法、読解力、発音)であつた。体格検査は、ミュルレル、ホフマンが自ら行い、体格検査が重視され、この検査で落とされる者もいた。合格者は全員寄宿舎に入った。

『文部省第二年報』(明治七年)によると、明治七年の東京医学校の在籍者は本科七十名、予科一六一名、退学十四名、現員二一七名で、「明治七年ヨリ八年ノ冬半期ノの初ニ於テ新二一一名ヲ増ス」と記されている。これが同期に入学した生徒であり、日記にあ

るように、殆どが六番舎に入ったものと思われる。

『文部省第三年報』（明治八年）には、生徒数四八八名、うち入舎生（予科および本科生）三二九名、通学生（後に別課生と呼ばれ、日本人教師による教育課程で、二十才以上の者で六十名を定員とし、明治八年より年二回入学）一五九名と記されている。

寄宿舎生活

この状況については河本重次郎が詳述している。

「長く三列に木造二階作の粗末なる大建築が南北に面して、前後に並び立て居て、それを長い廊下が中央を結び付けて居た。『略』二階も下も、各室皆、通り道の左右に並んで居たが為、南の室は好きも、北側の室は日がさ、ず、冬は寒くて困つた、部屋の左右には、壁に接して高き床あり、畳二丈を前後長なりに敷きたるものなれば、室内には都合四人入ることが出来た。下の畳座敷には、机を置き勉強に使ひ、夜は上の高床に入りて寝るのであつた。併しこゝに一つ危険があつた、それは「ランプ」であつた、夜分床に入る時、「ランプ」を枕の横に置き書を読む風が、一般に行はれ居りたるを以て、場合に依ては、此「ランプ」が転倒せぬとも限らん、或る夜、余は二時頃便所に下りて見ると、或る窓から火焰が吹き出で居た、そこで、余は大声で、火事よ〜と云つて大騒ぎが起こりしも、後の祭り、遂に寄宿舎一棟の長屋を全部焼失した。『略』寄宿舎は何れの級の人も入り居ることなれば、中には色々の人物が居た、その時分は未だ甚だ蠻風盛なるため、自然話の種々なる人も、

少なからざるなり、中には温厚の人もあり、荒くれた人もあり、酒客も居れば、勉強家も居た。」

また同時代に予科寄宿舎にいた森鷗外は小説『雁』の中で次のように記述している。

「まだ大學醫學部が下谷にある時の事であつた。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、碁盤の目のやうにした壁の所々に、腕の太さの木を豎に並べて嵌めた窓の明いてゐる、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になつてゐて、學生はその中で、ちと氣の毒な申分だが、野獸のやうな生活をしてゐた。勿論今はあんな窓を見ようと思つたつて、僅かに丸の内の櫓に残つてゐる位のもので、上野の動物園で獅子や虎を飼つて置く檻の格子なんぞは、あれより遙かにきやしゃに出来てゐる。」（傍点引用者）。「年齢の不足といふことが加勢して、何事をするにも、友達に暴力で圧せられるので、僕は陽に屈服して陰に反抗するといふ態度になつた。」（『キタ・セクスアリス』）。上京した時は、西周宅に寄寓して西洋風な雰囲気の中で生活し、年少で入学した。鷗外には寄宿舎の生活は馴染めないものだったものと思われる。この時代は、未だ維新以来の殺伐な氣風が収まらなかつたから、年少學生の氣風も推して知るべきで、その乱暴振りには医学校長の長與專齋も困り果て、適塾以来の親友、福沢諭吉に相談するほどであつた¹³⁾。

文部省の費用

当時の文部省の費用の主たるものは左の通りであつた。

明治六年の出金総計 一三八、一万円
 外国教師給料 二〇万円
 海外留学生学費 一四、八万円
 外国注文書器購求費 一二、五万円
 官員并雇給料 一四、七万円
 東京開成学校費 四、二万円
 東京医学校費 四万円
 府県小学委託金 二十六、六万円
 その他 四十一、三万円

外国人教師給料、海外留学費、外国注文書器購入費が全体の三分の一を占め、明治政府は文字通り金に糸目を付けず西洋文明の吸収に尽力したことを示している。特に外国人教師の給料は突出しており、医学校教師は二三〇、四〇〇円月で、ミュレル、ホフマンは六〇〇ドル（円）であったという。三条実美（太政大臣）八〇〇円、岩倉具視（右大臣）六〇〇円、大久保利通（参議）五〇〇円であった（*上*）ことから見ても、格別に優遇されていたことが判る。

教科課程

ミュレル等は、西洋医を短期間で大量に養成することを期待した明治政府の意向を無視し、ドイツ陸軍軍医学校をモデルにした基礎から臨床医学まで、予科三年、本科五年の教科課程を決めた。予科ではドイツ語、ラテン語および数学、博物学、動植物学などの基礎科目に重点が置かれていた（表1）。

表1 教科内容および在籍者推移

部	學	醫	學	大	京	東	校	學	醫	京	東
卒業	明治十六年	合格次第、卒業証授与	（十月二十七日）	學位授与式	二十六名	冬半期（十二月、五月）	十一月	夏半期（六月、十一月）	在籍者		
本科一等生	明治十五年	病理各論 外科臨床講義 内科臨床講義	内科臨床講義 外科手術実地演習	病理各論 外科臨床講義 内科臨床講義	病理各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	解剖學 生理學 化學 實地解剖	醫學動物學 化學 解剖學 生理學	物理學 醫學動物學 化學 解剖學 生理學	預科二等生	明治九年
本科二等生	明治十四年	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	預科一等生	明治十年
本科三等生	明治十三年	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	外科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	本科五等生	明治十一年
本科四等生	明治十二年	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	生理學 外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科臨床講義	本科三等生	明治十三年

注：教科内容は文部省第三年報（明治八年）より記載。
 在籍者は文部省年報、東京大學醫學部一覽に基づく。
 明治十年四月十二日、東京開成学校と合併し東京大學醫學部と改称。

お雇外国人教師

明治七年末の東京医学校の外国人教師陣は次の通りであった。

ウイルヘルム・デーニッツ (解剖学)

フリードリッヒ・ヒルゲンドルフ (博物・数学)

ヘルマン・コッヒウス (理化学)

ヘルマン・フンク (ドイツ語、ラテン語)

アガルトン・ウエルニツヒ (内科)

ウイルヘルム・シユルツエ (外科)

ルドルフ・ランゲ (ドイツ語、ラテン語、数学)

ニーヴェルト (薬学)

ヴィクトル・ホルツ (ドイツ語、地理、数学)

ミュルレル、ホフマンは契約が切れ、更に一年間宮内省お雇い兼
医学校教師になり、後任としてシユルツエ、ウエルニツヒが着任し
た。

明治八年には

アレキサンダー・ランガルト (薬学、化学)

レオポルド・シエンデル (数学、物理学)

明治九年には

ヘルマン・アールブルグ (動植物・博物学)

エルヴィン・ベルツ (内科、産婦人科)

パウル・マイエツト (ドイツ語、ラテン語)

が加わり、教授陣は整備された。

「佐々木日記」より入学後の学生生活を引用する。

明治八年

一月七日 晴 開業式各教師出席 ミュルレル氏申渡式後外出

一月二十五日 晴 ホルツ氏帰国ニ付本日ヨリランゲ氏皆受取ニ
等預科生写真 別語アリ実ニ拭眼セサルモノナシ

一月二十七日 晴 上野山ニ於テホルツ氏ト武三等預科生写真

二月一日 晴 一時十五分ホルツ氏親子帰亭 教師 校生過半

送別ステーション

七月一日 晴 一等教師ミュルレル氏ホフマン氏ト校生一同

有志ノ者同写 於加州邸之馬場 但シ阿氏共ニ不写

則ニ枚ニ写セリ 第一ニホフマン氏ト生徒 第二

ニミュルレル氏礼服ニテ又生徒ト同写 是不都合

アリシナリ

十一月二十三日 此日ホフマン氏帰国スト云

十一月二十四日 ミュルレル氏帰国スルニ付 校生一統ステーション迄送別

ヨン迄送別

教師が帰国する際は生徒達と写真を撮った。場所は下谷の教場ではなく、上野の山または加賀屋敷内であった。ミュルレルは礼服を着用したことが述べられており、東大薬学部東側の植込の中にある胸像(図2)のような、プロシア陸軍の帽子をかぶった礼服装で臨んだものと思われる。明治四年来日し、医学教育制度を確立したミュルレル、ホフマンは八年十一月下旬に相次いで帰国した。ミュルレルについては校生一同が新橋駅まで送った。

図2 ミュルレルの胸像 (『日本医療文化史』より)



期末試験(予科)

十一月二日 晴 試問前休始ル 定例休ノ如シ 然レトモ我級各生
自室同組集會 従来ノ学課ヲ素復暗誦等ノ為 日々五時間乃至十時
間ノ輪問ヲ設ケリ

各期末の五月、十一月は、前半の二週間が温習(復習)のため休
暇になり、月後半から試験が始まった。

十二月四日 晴 試問甲乙表を朗読 第一教師シユルチェ氏各等
級可表ヲ得タリ 殊ニ二等佐々木政吉 三等神田 一等□ノ四名

称誉セラレタリ且此般ノ大試問ニテハ等級昇落或ハ退校等アリテ
未會有ノ振革ナリ 本科生中ニモ十余名落第 預科一等生中十九落
第中六名斗ヲ除外退校セラル 二等預科生中二十名中二九名ヲ止メ
余ハ退校ヲ命ス 三等ニ至テハ三十五名落第就中 漸七名ヲ止メ余
ハ退校ヲ命セリ 吾級中三人 北里 中寫 山根一 a 次十一名一ノ印
ヲ得タリ
余及山脇等幸ニ此組ニ入ヲ得タリ 蓬萊ヲ除クノ他三印以下皆落第
サレタリ

「振革」とは、悪いものを振るい落とす大きな変革の意味と思わ
れ、成績が悪い生徒は落第のみならず退校処分になされ、同期入学者
では七名落第、二十八名退校になっている。表1に示したように、
明治九年には同級の二等予科生は入学時の一二一名から六十七名に
半減している。入学前の予備教育で、ドイツ語の基本を学んでいな
いと、ドイツ人による講義に付いて行けなかったものと思われる。
陸軍軍医であったシユルツェもミュルレルの方針を踏襲し、厳格な
試験で容赦なく大量の退学を命じている。

尚、北里柴三郎の年譜には、東京医学校入学は明治八年十一月と
あるが、この時期には学期末試問を受けていることがこの日記に明
記されており、従って入学時期は佐々木らと同じく明治八年冬半期
(開始は明治七年十二月)に合わせた明治七年十一月と思われる。

明治九年

一月二八日 新教師マイエット氏吾教場来傍聴
二月十一日 晴 マイエット氏初教加減乗除ヲ檢セリ
三月二日 晴 ランゲ氏多数ノ生欠席スルニ怒リ手帳ニ其姓名ヲ留ム

三月十一日 快晴 毎土曜日三時ヨリ二時間 一二三四等本科生中有志者教場ニ集會シテ嘗テ学ヒタル医学課及自固ニ臆スル処ヲ講シ以復修ス忘失ヲ除キ間接ニ於テ演舌ヲ習ヒ漸ラ以大業ヲ起サントス同校生ノ傍聴ヲ許ス 是ニ由テ彼輔仁會ハ午後七時ヲ以テ始メント決ス

九月十二日 開業但別ニ式ナシ 博物教師ヒルゲンドルフ 理化学教師コヒユース 専門語学教師フンクノ三博士ハ条約期限充チテ校ヲ辞去 コヒユース フンクノ両氏ハ帰国セリ 依テ学課ノ受持等漸稍改革シ我輩級甲乙二分別セルモ此般合併 羅甸学マイエット氏ノ受持等ハシエンドル氏ノ受持トナレリ

校内での会話はすべてドイツ語

校内においては、ドイツ語で会話を行うことに決めた左記の盟約がある。

盟約乃原素（作成佐々木曠）

凡 国乃事業学修ト実地トニ成ルモノニシテ甲乙必ス平均セザルベ

カラズ然リ而シテ乙ハ語学等ノ学課ニ於テハ最モ緊要ナルモノニシテ小児ノ語ヲ習フ以テ知ルヘシ而シテ我輩日獨乙学ヲ従事シ茲ニ一年余其ノ受クル処ハ皆文法熟字作文等ニシテ 多クハ実地ニ就クヲ得ザリシニ幸ニ本日本同志ノ結社アリテ通常ノ交際ニ於テ互ニ獨乙語ノミヲ以テ会話センコトヲ同盟シ次條ヲ決議ス

第一條 校内ニ於テハ互ニ獨乙語ヲ以テ会話スベシ

第二條 或ハ語ノ知ラザルアレバ靜ニ之ヲ質問スベシ 若シ其人ノ之ヲ知ラザルトキハ不得已國語ヲ混入シ語ルベシ

第三條 勿云對話ノ際細心注意シテ文章ノ誤ヲ正シ 互ニ其是ヲ告

ケ論以漸次其功ヲ奏セシムルハ是同盟ノ目的トスル処也

一 同盟ノ者会話ノ際獨乙語ヲ通知セサル者ハ其談話ニ加トキハ必國語ヲ用ユベシ

一 不得已事故アリテ明弁速談ヲ要スルトキハ前以其旨ヲ述ベテ后國語ヲ用ユルモ可ナリ

コッホは北里柴三郎との初対面で、北里がよくドイツ語を話すのに驚いたと述懐しているが、予科で徹底したドイツ語教育を受け、読み書きと会話能力は高いレベルにあったものと思われる。

モースの貝塚発掘

明治十年十月

開成学校御雇教師イーエスモールス氏汽車ニテ大森ヲ經過セシトキ一ノ小芥丘ヲ觀察シ只物ナラヌカ此頃遂ニ其二着手シ此丘ヲ

發キシニ一問程ノ所ニ果テ太古人民ノ品類 甕瓶 凡食器等夥シク掘出タリ 其器物ノ形状ハサモ米國土人ノ作為セル物ニ似タリ 依テ想像スレバ日本太古ノ人民ハ乃米國太古ノ人民ト同人種ニテ アイノー人種ガ先之ヲ驅リ除ケ其ノアイノー人種ヲ今ノ日本人ガ 逐除此國ニ居住スルコトトハナリシナランカトモ云ヘリ

初代動物学教師、F. S. モースは『日本その日その日』（石川欣一訳）で、発掘した物品を詳細にスケッチし、また東京の「日日新聞」が掲載した彼の発見に関する讚評的な記事を引用して、右記とほぼ同じである。この新聞記事は当時相当センセーショナルなものであり、これを読んだ佐々木は日記にそのまま記載したものと思われる。

東京大学医学部本科時代

同盟結社

明治十一年二月八日

預備生中有志集同盟演舌會ヲ起 毎月第一第三ノ土曜日ニ之ヲ開クコトニ決ス 同級北里柴三郎之ガ主擔當ナリ

『北里柴三郎傳』にはこれに関連し、次の記述がある。

「本郷に移る前後の頃から先生は主謀となつて、同盟社と称する生徒の結社を造つた。「略」結社の目的は苟も男子にして志を天下に有する以上は雄弁でなくてはならぬといふに在つて、毎土曜日に

演説会を開き、盛に討論を行ひ、激論熱弁を以て政治、外交、軍事、教育と有らゆる問題を議し、天晴れ憂國の士を以て自ら任じたものである。又同盟社はメモランドと称する講義要項の印刷や、これの配布に斡旋するような事務の外に、擊劍、柔道等の會合は勿論、ストライキ其の他校内に起る大小出来事の策源地となり、或は怖れられ、或は異端視された。」

医学部第一回卒業式

明治十一年三月廿八日

午後二時ヨリ東京大学医学部製薬学生徒九名ノ卒業式アリ 大広場 美麗裝飾ニ段上ニ文部大輔田中不二麿 同少輔神田孝平 本部総理 池田謙齋（告詞ニ統證書ヲ銘シテ渡） 同心得長与専齋 一段上文部 御雇教師モルレイ 同大少書記官 三学部教官員 本部教師ギールケ 氏以下十二名 教官ト員一同平席 中央ニハ證書ヲ受クル人 両側本部生徒内外傍聴人 新聞記者等総員合八百有余名ト云 卒業生徒ハ各実績ヲ演舌ス 下田順一郎 豆腐荒菁ノ論（各分析アリ） 丹波（敬三） 酒吉田（学） ニコチン 高橋（三郎） アルコール 永淵（嘉博） 野村（徳太郎） 丹羽（藤吉郎） 此演舌終テ教師ギールケ氏演 舌拍手賛称ノ声滿場（括弧内の名前のみ引用者注）

『東京帝國大學五十年史』¹⁸では、この第一回卒業式は三月二十九日となっている。卒業生は医学本科生には該当者がなく、製薬本科生九名のみで、各自の研究を発表した。下田は下村、野村は三村の

聞き違いと思われる。これら九名の学位は翌十二年十月十八日、同年卒業の医学本科十八名および製薬学本科十名とともに授与された。

給費制度

四月

過十年十二月中我級五等本科生一同ヨリ給貨願出候処 校費多端余金ナキヲ以テ願書差戻サレタリ 其後十名斗惣代トシテ校長池田謙齋宅へ参り嘆願之趣具ニ申迫リタレトモ畢竟右給費スベキ余金ノ旨ニテ採用不相 其後格別之後御詮議ニ由テ極貧ニ三月ヲモ保統難致輩ニ限り 月々食料月謝金合セテ二円五十錢拜金合テ借致度願出候処 漸々御許容ニ相成 即十四名ノ生ニ二月分ヨリ御渡ヲ相成 月末月末ニ受取来候 三月中三円ノ給費許可致ヘク故願書可差出旨総監事ヨリ通知有之候ニ付 二十余名願書差出候 四月中解剖(二人) 生理眼科(各一名) 相設候故有志願ノ輩クジドリ以テ相極メ可願出旨名前書付ヲ以テ此ノ内ト通知有之候ニ付 則黒柳真部 木村川俣之ニ当願出候 月金六円宛奉事卒業後倍年 但卒業後一時金上納致者自由タルベキ定

明治九年『東京医学校年報』には「明治九年三月貸費生ヲ廢シテ更ニ給費生ヲ置キ其規則ヲ設クルコト左ノ如シ 従前ノ貸費生中 学才俊秀ニシテ體質強健ナルモノ 貧困ニ由リ其修業ヲ遂クルコト能ハサルモノハ更ニ第一号式ノ願書ヲ出サシメ文部省ニ開申シ授業上必用ノ物品(図書筆墨紙ノ類) 或ハ衣食等ノ費額ヲ給シ第二号式ノ証

書ヲ出サシム 但其費額ハ一ヶ月金六円以下トス 給費生成業ノ上ハ〔略〕一ヶ月金八円以下ノ報酬(授業モ其内ニ含ム)ヲ納ムベシ 但一時或ハ四年以内ニ分賦シ月々ニ納付スル等ハ勝手タルヘシ」とある。川俣四男はくじ引きで六円ノ月の給費が当たった。給費の返還は卒業後に、年賦でも一括返還でもよいと定められていた。

鉄門落成

五月八日

本部教員官員大集會 開校式ノ事ヲ議ス 教場修覆白壁塗替等アリ 且開業式有之マデハ入事ヲ許サズト達アリ 庭等清淨美裝 鉄門落成 然レトモ開業式施行ノ日未決

東京大学医学部の象徴たる鉄門は明治十一年五月に落成し、その時期に大久保利通刺殺事件が起きた。

大久保利通刺殺事件

明治十一年五月十四日

朝 大久保利通参朝ノ途上 紀尾井町ニテ凶賊石川県士族島田一郎 長 豪等六人ノ為ニ殺害セラル 此日ヤ朝ヨリ雨天ニシテ鬱シ此 凶報午後二時校舎ニテ始メテ我が耳ニ入りタリ 即北里氏ノ矢島 家ヨリ聞傳ルトコロ 始メ石川県士トノミ聞タル故 一時ハ大警且 怪ミ疑念晴レズ 校内尋問スルニ方ナク 新聞付録唯賊トノミアリ 更ニ分明ナラズ

晩 小松亭ノ牛店ニテ或客ノ一小紙片ヲ手ニシ 本日凶報是非評スルアリ進テ之ヲ問フ

則本日ノ凶賊ノ人名ニシテ直ニ取テ之ヲ見ルニ其姓名六人共嘗テ聞及ビシ人ニモアラズ 且石川県金沢ニハ忠告社トテ逆論家アル由ナレバ 恐クハ此ノ党所為ナラント評モアリ 則チ全ク此ノ党ニテ二十日前に本県警察吏ヨリ忠告社頭出京シ何カ様子アリゲナレバ宜布御探偵注意アルベキ旨報知アリ 且五日前大久保ニ近々公ヲ殺害スベキ故外出ノ際注意スベシ杯ノ急文ノ書簡来リタル由 且島田五日前大久保邸ニ到 面会ヲ乞ヒシニ折悪客アリ 不得其義空帰 交アリシ朝モ公邸ニ至リテ御出勤ニ相成ナリシヤドチラノ□ニ前ニ御出ニ相成ベキヤヲ問テ帰リシ由

この時期、福井は石川県に所属していたため、凶賊が石川県人と聞いて、佐々木は知人や否やを懸念したが、無関係であることが判り安堵したものと思われる。

五月十七日

午後二時出棺青山墓所へ葬ル 其式美ニ壮大兵隊前後ニ巡查両側大臣 参議 皇族 勅使勅奏判ノ諸官員 府県ノ長 次官等馬車引切ラズ 外国公使等送供セリ 一行邸ヨリ青山マデーツツキ全ク一時間ヲ費セリ 第一、内務省官員ヨリ供セラレシタル榊木根両側ニ昇キ行静 次ニ紅白ノ旗十流中央へ贈右大臣正二位大久保公之棺ト黒書シタル白旗高クニ建行 次ニ神官馬車本居権大教正外中教正乗馬 枢立派ナル輿ニ乗セ五十人白装ノ昇夫 次ニ利和ヲ始メ家族親族等

陸続此日ハ午後晴天ニテ観客四方ヨリ来集道路ノ両側密並ス

利和は利通の長男である。利通の令息（後の牧野伸顕と思われる）が教え子の中にいたモースも、この事件が市中に深刻な感情を煽り起こしたと記述しており、政府の浪費が激しいというので、大いに苦情があつたらしいとその背景を考察している。西南戦役で財政が苦しく、重税で庶民の不滿をかつたものと思われる。

期末試験（本科）

明治十一年五月十六日

試験相始 但□デーニッツ氏 病理解剖生教場ニテ有□□ノ一第一ニセシデル氏 理数学ランガルド氏 化学六七時間 次ニ廿四日ヨリギールケ氏 アールブルグ氏 廿七日ニ至 皆々相済タリ 今回試験別シテ宣布出来□評全校ニ轟ク 実ニ吾輩ノ面目千万ギールケ氏モ吾級生ノ学力一整ナルヲ大ニ称シタル由 田原ノ話ナリ 試験ニ欠タル生ハ中寫 真部 劉 藤井ナリ 四等本科ハ解剖試験日延ヲ乞フ 一等予科ハ博物学ノ試験不受ズト云 共ニ大ニ其名ヲ汚 且ランゲ氏ハ病氣ニテ引コモリ廿八日ヨリ出ラレタリ

六月三日

大広間ニ教師官員教官一同集會（但校長列席セズ） 一等教師代理ギールケ氏此會大試験ノ景況ヲ演舌 各級ノ評ヲ下シ点数ノ比較等一々挙述シ遂ニ成績試験表ヲ読上ケ 一二等本科生ハ此度試験ナシ三等ノ表ハギールケ氏 四等ノハランガルト氏 五等ノハセシデル

氏一等預科ノハランゲ氏二等ハマイエツト氏三等はコルセド氏
 製薬一三等ハマルチン氏朗読ス此試験中吾五等本科最美ニシテ
 通点一二当ル教師大ニ之ヲ称シ大ナル満足ヲ以テ之ヲ教育スル旨
 ヲ述リ製薬生モ通点一他ノ本科生ハ一ヨリ一ノ通点預科一等ハ
 一ヨリ二二等ハ二三等モ二之ヲ順列スレハ五等三等四等本科一
 等三等二等預科二等預科ニハ不良生最多シト云アリ

六月四日

直ニ開業吾級ノ学課ハ一週間ニ解剖学筋編四時組織学四時顕微
 学演習三時間金属化学四時理学四時ステレオメトリー二時医用
 植物三時同動物学一時合二十五時間教師ハギールケ氏ランガ
 ルト氏 センデル氏 アールブルグ氏五等本科点数ヲ受ル生名
 山根内田大谷河原齊藤 一ノ甲
 浦島河本中山陣内緒方鶴崎隈川鈴木磯木村 一
 黒柳川又黒田山脇山本千原 一ヨリ二
 高橋南北里佐々木 二
 中寫池田真部劉藤井 欠

十二月三日

午前九時一同成績読説アリ一等教師シユルチェ氏一般ノ試験景況
 ヲ演舌ス不相変吾級五等本科最良級次二二三等四等本科一
 二三等預科の順ナリ余ハ幸ニ一ヨリ二ノ点ヲ得タリ

明治十一年の冬、夏半期の成績は、この五等本科生の級は最優秀
 であったことが記されている。

明治初期東京大学医学生川俣四男也—その学生生活を中心に

図3 演舌会名簿 (佐々木家蔵)

氏名上の数字は演説の順番を示す。(下段注引用者)

二月	廿四日	廿五日	廿六日	廿七日	廿八日	廿九日	三十日	三十一日	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	
南 二郎	佐々木 曠	山本 治郎平	河本 重次郎	藤井 浅田 决	鈴木 規短次	鶴崎 平三	緒方 太郎	川原 邦太郎	千原 春南	真部 於兔也	山脇 兎弥太	大谷 周庵	内田 専太郎	黒田 復太郎	川俣 四男也	黒柳 精一郎	高橋 勝三郎	齊藤 駒吉	池田 陽一	陣内 主一	
磯 轟	劉 小一郎	中島 幸二郎	北里 柴三郎	木村 孝藏	隈川 山本	劉															

明治十二年

演舌会

二月三日 学課復習會ヲ設ケ切磋琢磨演舌ニ狃シ訳語ニ直シ社会の親睦ヲ期セントテ同志ノ輩ヲ集メ會ノ概則ヲ議ス衆議ヲ以十一ヶ条ヲ決ス 同級中山根 浦寫 中山ハ事故アリテ今回ハ入社セズ月番ヲ以幹事二名ヲ置キ會ノ諸務ヲ担当セシム 第一金曜日午後四時三十分開會 會員皆出席 幹事山本 劉 演舌者ハ関ラス順列ヲ定ム 則チ第一回ニハ余 北里 中寫ノ順ナリ 消食機関 心脈呼吸筋ノ三論アリ 開會次限二時間 当初第二預備教場ヲ借用シ後會ヨリ第四番教場ヲ用ユ 且午後二時ヨリ四時マテ又木曜日ト改正ス 第二回ニハ則第二木曜日 山本次郎平 ダルウイン氏ノ變遷論ノ起始目的 千原春輔 男女胎生區別 此時女子師範校ヨリ出火直ニ閉會ス 第三回ニ千原春輔 前回ノツツキ 真部於免也 泰西解剖由来高橋勝三郎 太古希国ノ一戦起 黒柳精一郎 齒ノ組織ヲ論述ス

順番を決め、各自がドイツ語で演説したもので、この時の佐々木作成の名簿を図3に示す。ダーウインの進化論についても論述しており、モースの影響が大きかったことが窺える。

明治七年十一月の入学生は、本科（五等生）に進んだ明治十一年には三十一人に激減した。本科に進んでからも落第、中退、病死者がいたことになる。この原因は本人の都合、規則違反等のほか、進級の可否を決する学期試験の厳格さ、それに予科を卒業しても本科に進まないなどであった¹⁾。

新聞印刷事業

六月六日頃ヨリ石川新聞四葉ツ々合束配達ニス 當級活版分職左ノ

如ニス

主任 北里

校正掛 四人 中しま 中山 陣内 余

集金掛 川俣 月番ニ委任

謄写掛 余等

五官活版ヨリ相始ム 加入百五十名斗

北里柴三郎がリーダーになり、この級で各分担を決め、新聞印刷および配達をしていたものと思われる。級でもめ事があると「北里君が出て行つておさめ役を為したものであつた、又、級に何か相談会でもあると、北里君が議長と云ふ風で、今日、同君が有名となりし一つは、此議事的、事務的才を持たれたからであると思ふ、其時分「不肖柴三郎」と云ふ様な語調で、議されたものであつた、兎に角、同君は吾々よりも四、五歳上で、先づ先輩の格であつた。」と河本重次郎は述べている。

明治十三年

第二回学位授与式

七月十二日 学位授与式アリ 受ル者十九名

授与者は、十二年十月卒業の二名および十三年卒業の十七名であ

る 19。

理科試問

九月廿日 理科試問施行ニ決スデイツセ氏解剖試檢□□ニ付

大紛擾 漸ク止ム

十月十六日 理科試問進級証書授与式アリ 余上点ノ全成績ヲ得

タリ

解剖学教師デイツセと試問について紛争があつたようであるが、九月廿四日より廿七日まで施行された。

この時の全成績が「中」であつた川俣四男也の成績書を図4に示す。

解剖学(ギールケ)、生理学(チーゲル)、化学(ランガルト)、物理学(シェンデル)の四科目で、評点は「上」、「中」、「下」であり、二科目が「下」であれば、半年後改めて四科目を試問し、向上が認められない場合は、五等生の学科より再学習するか、さもなければ退学になつた(19)。

化学実験の佐々木筆記による講義ノートを紹介する(図5)。

化学実験の一例として、水素を発生させ酸化銅の還元および燃焼実験が記述されている。明治二十二年、北里柴三郎がコッホの研究室で、嫌気性の破傷風菌の純粹培養に成功した。北里が考案した「亀の子シャーレ」に検査材料を入れ、これにキップの装置で発生させた水素ガスを充填して空気と置換し、シャーレ両端の狭小ガラ

図4 理科試問成績書 (川俣家蔵)

(注 生まれが安政六年六月とあるが、戸籍では安政五年十一月である。)

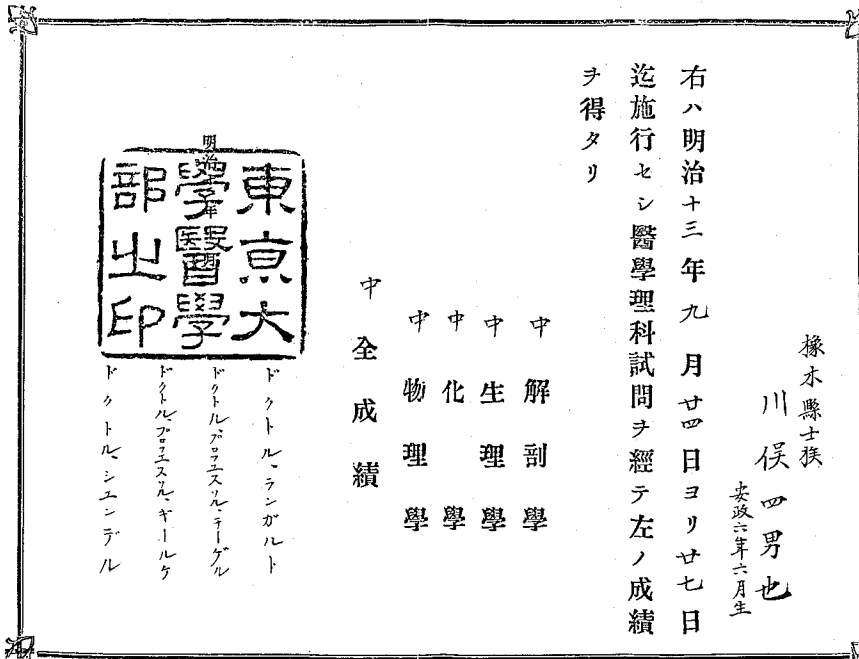
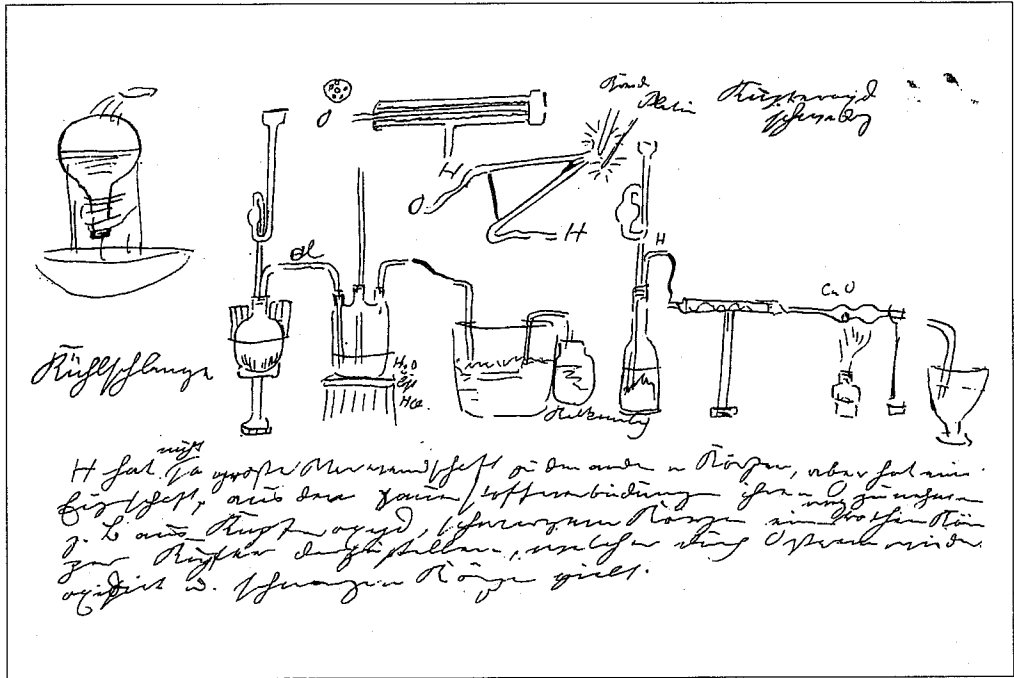


図5 化学実験ノート (佐々木家蔵)



ス管を溶封するものである²⁰。危険な操作であるが、細心の注意を払って成功させた。水素を扱うことは、その十年前の東京大学での化学実験で習得しており、これがベースになっているものと思われる。

シユルツェとスクリバ

明治十四年五月二日

医学部外科教授勲四等ドクトルシユルチェ氏解約満期ルヲ以ナリ昨日五六等及一二等本科生ヨリ記念表トシテ西陣織物二反ヲ同氏ニ贈ル同氏大喜フ後任教授已ニ途上ニ在リ本月内ニ着京スベシト

五月七日

勲四等外科教授シユルチェ氏約期満テ帰国本科生皆新橋ニテ送ル

シユルチェは五月八日に横浜を発ちスエズ回りで帰国した。またその際日本人医師(学生)有志の送別の辞があり、感謝の印として記念品を贈ることが記述されている。贈り主は明治十四年卒の中濱、小池等九名、一等本科生柴田および二等本科生北里、大谷、佐々木、川俣等二十名である²¹。

六月

外科教師スクリバ氏来着十日以開講フライブルグ市ノ大学マルク氏ノ第一介補ナリ全血疲痕ヲ以テ掩フ学ハ深カラサルモ余程落ツキタル人ナリ先一概ニ申サハ前師シユルチェ氏ノ反对人ナリ

スクリバは六月六日来任した²²。シュルチエは神経質で持病の頭痛に悩まされた。スクリバの性格は恬淡で豪傑風、辺幅をかざらず、家庭はきわめて開放的で、助手達を自宅に招き、杯を手に談論風発、愉快な一夕を過ごすことがしばしばであった²³。

東京大学四学部初の学位授与式

明治十四年七月九日

東京大学四学部一同ノ卒業生ノ学位授与式ヲ神田三学部内ニ行フ
医学部は製薬学生ヲ併セテ惣員三十七名 式場先般擴ケ出シタル演
舌堂ニシテ 各窓国旗ヲ又シ 場外海軍楽隊奏ヲ奏シ 学位記ヲ
渡シタル後加藤大学綜理四学部大略ノ報告ヲ為シ論詞ヲ述フ 学生
惣代答詞ヲ述フ 法学部教授鳩山和夫 文学部教授外国人某 理学部
教授菊地大麓 医学部教授ベルツ氏代ル²⁴ 祝詞ヲ述ヘ 遂ニ文
部卿福岡孝弟祝詞ヲ述ヘ式終ル 別室ニ於テ夜會ヲ開キ 親戚並学
生ヘ弁当ヲ与フ 此四学部合併ノ学位授与式ハ一昨日漸ク定リ其ノ
混雜云レ方ナリ 故ニ觀場券ハ医学部預科生ニハ行渡ラサリシ夜
ニ入り江燈ヲ点シ電光機アリ式ハ七時(午後)之ヲ始メ十時過終ル

明治十四年六月十五日に四学部が統合され、加藤弘之が初代の東京大学綜理になった。この時の医学部卒業生は森林太郎、中濱東一郎、三浦守治、小池正直、江口襄等二十八名であり、式の模様は「東京曙新聞」(明治十四年七月十一日付)²⁵ および「東京医事新誌」(一七二号一八八一年)²⁶ でも伝えられている。文学部教授外国

人某はホートンである。

明治十五年十月九日

東京大学綜理ヨリノ布達ニ依リ曠ハ四円(老ケ月)ノ給費生ナルヲ以テ医学部寄宿舎ニ入ル 同級給費生(一等学生)二十二名入舎 其他学生中二三四等生合セテ二十余名 皆給費官費生ナルヲ以テ入舎ヲ命セラレタルモノノ、私費学生ハ一人モ入舎ヲ許サズ 入舎生は首ニ豫備門分養生徒ナリ 学室ハ日替各二名(豫備門) 或ハ三名(学生)ヲ容ル 舎則ヲ改正シ仮規則ヲ設ケ寄宿課ヲ置キ諸事頗ル整頓ニ向フ 課長村岡講師ナリハ云 仮規則中改正ノ首ナルモノハ

- 第五條 入舎生ハ外出ノ際ハ勿論舎内ニ於テモ必ス袴ヲ着スベシ
- 第六條 各級月番四名ツ、ヲ撰定シ届出スベシ
- 第七條 毎土曜日室内大掃除ヲ為シ午後四時マテニ検査ヲ受クベシ
- 第八條 時間表ヲ遵守スベシ同ク晨起何時黙読、消燈、就寝何時云々ノ制限アリ
- 第九條 一切來訪人室内ニ入ラ禁ズ
- 曠ハ抽籤ニ依テ第五番室(南側)ニ北里柴三郎 山本次郎平ノ二氏ト同宿ナリ

医学部寄宿舎には給費生しか入れなかったとあるが、経済的事情あるいは成績により選別されたのであろうか。後出の卒業写真にあるように、袴着用が当時の学生の制服であったのと思われる。な

お明治十四年八月二日を以て本科生を「学生」、他を「生徒」と呼ぶことになった²²⁾。

卒業

明治七年十一月に入学した学生は、同十五年十一月に八年間の全教科を終了し、十六年には卒業試験を受けた。

「醫學學生卒業試験規則」²³⁾によると、試験は一月中旬までに申請し、二月～六月の間に行われ、各科目を及第した学生に醫學士の称号が与えられた。この規則を要約する。

解剖学および生理学試験では、二人の試問委員が各担当分野毎に、四期に分け毎期四人以下の学生を一組にして行つた。第一期は骨論及び内臓論で、用意されたプレパラートを生徒に抽選で選択させ、説明させた。第二期は組織学で、プレパラートを顕微鏡観察させ、その学識を試問した。第三期は死体または生体の局所解剖を試験した。第四期の生理学は問題を抽選で選択させ、その学識を試問した。これらの科目の平均点が「乙」以上の者が、一週間後に次の外科眼科試問に進めた。外科及び眼科試問は、病床実験と論理試験に分かれ、病床実験は一週間に二人の患者を試問委員の前で施療し、原因、診断、以後の治療方法を毎日病床日記に記録し、六日後に提出させた。論理試問は外科総論、各論、手術篇より二箇選んで回答させた。内科試問は、外科同様病床実験と論理試験に分け実施し、産科は論理試験で、薬剤学は問題並びに種々の処方について試問した。「丁」、「戊」の者は、二～四週間の復習後に再試験を課せられた。

再試験後及第しない者は、その年中に更に試問を受けることは許されなかった。各学科の成績は次のように点数によって定めた。

甲…五点、乙…四点、丙…三点、丁…二点、戊…一点
各期の成績はこの平均点で、更に全成績はその平均点で左記の基準で評決した。

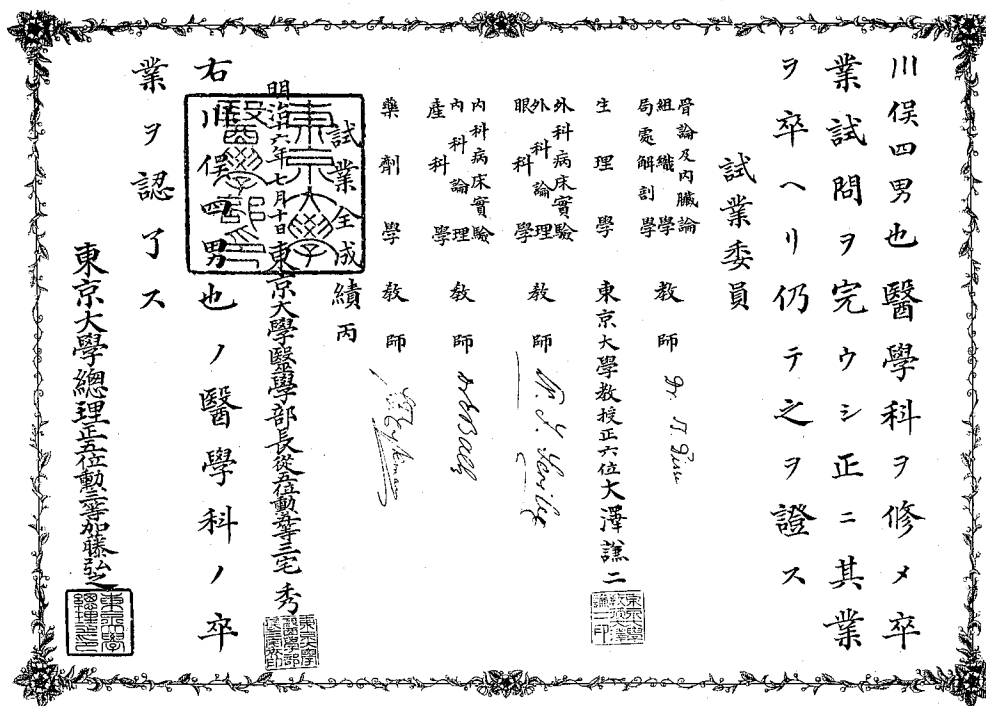
甲…五〇四・五、乙…四〇四・四〇三・五、丙…三〇四〇二・五、丁…二〇四〇一・五

「明治十六年醫學々生卒業試験成績」の一部を図6に示す。卒業生二十六名中「甲」を評価されたものは二名（河本、大谷）のみで、「乙」十二名、「丙」十二名という厳しいものであった。川俣四男は、試験全成績が「丙」（図7）で、点数36順序（席次）

図6 卒業試験成績（東京大学医学部蔵）

明治十六年自二月醫學々生卒業試験成績		姓名
乙	丙	川俣四男
乙	丙	藤島信
乙	丙	北里紫三郎
乙	丙	田守一
乙	丙	村孝藏
乙	丙	水谷重次郎
乙	丙	本重次郎
乙	丙	谷周巻
乙	丙	石川
乙	丙	原春南
乙	丙	原春南
乙	丙	河本
乙	丙	大谷
乙	丙	澤主一
乙	丙	川宗雄

図7 卒業證書 (川俣家蔵)



は十八番であった。

卒業證書にこの「全成績」が記載され、試業委員として骨論及内臟論、組織学、局處解剖学はディッセ (Dr. J. Disse)、外科病床実験、外科論理、眼科学はスクリバ (Dr. J. Scriba)、内科病床実験、内科論理、産科学はベルツ (Dr. E. Baetz)、薬剂学はエイクマン (J. F. Eijkman) の署名、生理学は前年ドイツ留学から帰った大澤謙二の署名および捺印がある。

川俣四男也の證書授与日は七月十日であるが、北里柴三郎は四月廿一日付で授与され同月内務省に勤務した¹⁸⁾。また大谷周庵は四月に卒業し五月に新潟医学校に就職した¹⁹⁾。従って卒業試業に合格次第、各人に證書が授与され、各々任地に赴任したと思われる。

十月廿七日に東京大学四学部の学位授与式が挙行された。在京または地方に赴任した卒業生に、同年より発行された「官報」を以て出席するよう広告を出し、式の模様、学位授与者名についても成績順に「官報」に記載された。医学部はスクリバが祝辞を述べた²⁰⁾。

卒業生は全学で六十七名、うち医学部は二十六名であった。ミユルレル、ホフマンが確立した医学教育制度に基づき、ドイツ人教師により基礎科学から鍛えられ、厳しい試問に耐え抜いた将にエリートたちである。全卒業生の学位記に「爾後優待令名ノ此位ニ属セル者ハ永ク汝ノ享有ニ歸セン」とあるが²¹⁾、文字通りその後の官職等で優遇された。尚、坪内雄蔵 (逍遙)、三宅雄二郎 (雪嶺) も同年の文学部卒業生であった。

図8 卒業写真（「醫者大谷周庵」より）



明治十六年五月大學卒業に際して
撮影す。卒業生の一部

周庵二十五歳

後列

浦島堅吉
眞部於寛也
池田陽一
山本次郎平
岩佐登彌太

前列

大谷周庵

佐々木 曠

川俣四男也

黒柳精一郎

川原 汎

隈川宗雄

高橋盛寧

山根文策

○

木村孝藏

スクリッパ先生

鶴崎平三郎

北里柴三郎

中山專太郎

浅田 次

千原 春甫

卒業後のこと

河本重次郎の『回顧録』より引用する。

「川俣と云ふ一人が居た。此人は栃木県烏山の人であつたが、卒業後に、新潟学校で眼科をやられ、後ち故郷に帰へり、矢張り眼科を専門として居られたと云ふが、先年病を以て、國で没せられたと云ふ、此人は卒業後、本郷の山本と云ふ下宿屋に居られた。余も卒業後、その三畳の間を、月三元（賄共五円、引用者注）で借りて、

下宿して居たことがある、其時、川俣君は、其家の娘某を妻に貰はれた、今も其妻君は存命と聞き及ぶ、」

ここに記述された卒業とは、明治十五年十一月の全教科終了（表1）を意味し、卒業試業期間中は寄宿舎を出て本郷の下宿に移つたものと思われる。

明治十六年十二月、本郷弓町（現在の本郷一、二丁目）の下宿の娘、山本ヤスが入籍した。

なお、ヤスは昭和二十三年七月、八十三才で没した。

新潟醫學校就職

明治十五年二月十七日の太政官布達第四号をもって、卒業生が無試験で免状が得られる甲種医学学校になるためには、医学士が三名以上いることが要件であつた。

即ち（一）医学士の教諭が三名以上いること、（二）生徒の員数に相当する助教を置くこと、（三）四年以上の学期を定め教則、試験法を完備すること、（四）付属病院で生徒の実地演習をすることであつた。

既に五月に同期生の太谷周庵が新潟医学学校の一等教諭として赴任し、外科の講義を担当した。八月に川俣四男もおよび浅田決が一等教諭兼付属病院医長として赴任した。これで医学士が三名が揃い、同校は甲種医学学校として認定され、翌十七年の卒業生から内務省試験を要せず医術開業免状を授与できるようになった。このため東大医学部卒業の医学士は全国の医学学校から引く手あまたで、新潟医学

校での初任給は百二十四円と破格の額であった。また、東大医学部別課製薬学科を十七年二月卒業した次兄、井上敏²⁶も同校三等教諭薬局長を務めた。尚、井上敏の前任者、高橋三郎は「佐々木日記」で前述した東大医学部の第一回卒業生（明治十一年三月、製薬学科生のみ）であり、準教授として東大医学部製薬学科へ転出した²⁶。

海軍任官

明治十九年八月新潟医学校を辞職し、同年九月、海軍大軍医に任官した。

明治十八年、内閣制度発足と共に、西郷従道が初代海軍大臣に就任し、衛生部長は海軍の脚気対策で功績をあげた高木兼寛で、第一期の海軍拡張が始まった。横須賀の他に、呉、佐世保の鎮守府の建設が始まり、これに応じ多くの軍医が必要になってきた時代であった。東大医学部卒業生には特別任用の優遇枠があり、大軍医（大尉相当）、軍医少監（少佐相当）に任官された²⁷。第二海軍区鎮守府（呉）建築委員として、同地の海軍病院建設に関わり、半年後に横須賀海軍病院に移り診療に従事した。明治二十年十一月、依願免官になった。短期間で辞めた理由は定かではないが、給費生であったため、公職につく義務を果たしたとの言い伝えがある。

新潟で開業

明治二十年十二月、新潟市西掘で眼科を開業した。「新潟新聞」

の開業広告に、「生義昨年八月新潟医学校を辞し爾来海軍に奉職罷在候処今般眼疾の爲め辞職當区左の番戸に於て開業致候條此旨辱知諸彦え謹告併て患者え報道す付言貧困にして薬価弁し難き眼疾患者に限り施薬す」とある。医学校時代の人脈があったこと、新潟には眼病患者が多かったこと²⁸が開業の理由と思われる。

明治二十七年、八年の日清戦役では、軍の衛生部で診療奉仕をした。

故郷へ帰る

明治三十年、大腸カタルで体調を崩し、郷里烏山へ帰り開業した。

既に長兄は志半ばで逝き、烏山では、東大医学部別課医学科に在籍したが、卒業を待たず医術開業試験を受けて医者になった三兄、英夫が家督を相続し開業していた。明治三十三年、英夫を院長とする川俣病院を設立し、四男也は眼科を担当した。後に次兄、井上敏も薬剤師として参加した。

英夫は父誠の血を最も濃く受け継ぎ、医者、教育者、政治家でもあった。同町出身で東大医学部を明治十四年に卒業した江口襄とは、戊申戦争で共に幼年藩士として会津出兵に参加し²⁹、以後も親交があった。江口の推挙で警視庁に勤め、明治二十二年警察医主任時代に、明治憲法発布の二月十一日に文部大臣 森有礼を襲った刺客（西野文太郎、刺殺直後に有礼の書生に殺害された）の検死をおこなった。更に死屍の致命原因鑑定のため司法省解剖室で剖検を執

行し、これが裁判医学教室剖検第一号と言われている^⑧。江口がドイツ文献（シユウレ、他著）を抄訳した『精神病学』の増補版で、読者に判りやすくするため、英夫が各種精神病の症例をあげ校正した^⑨。また私費を投じ烏山に中学を創立し（現栃木県立烏山高校）、更に町長、県会議員も務め、東北線宝積寺に至る烏山線の敷設に腕を振るうなど八面六臂の活躍で、烏山地方の活性化に貢献した。その英夫を、敏も四男也も烏山中学の講師、校医として支えた。

死期を悟った四男也は遺産相続に関する遺言書を作成し、二ヶ月後の大正十二年一月五日、脳溢血で没した。享年六十四才。兄の敏、英夫も翌年相次いで世を去り、敏は同町の善念寺に、英夫と四男也は誠の眠る一乗院に共に葬られた。因みに江口襄の墓も同町の養山寺にある。

平成十六年、八十一年振りに墓地を修復すべく発掘した。四男也の遺骨は土に帰っていたが、入れ歯と共に本人の下顎の大白歯が出た。歯は骨より組織が密であり、入れ歯（下顎部分床義歯）のゴム床で包まれていたためか、幸運にも八十一年間、土中で残ったものと思われる。この歯を食いしばりながら、必死になって勉学に励んだ明治初期医学生の方と心意気が忍ばれた。

おわりに

幕末までの抑圧されたエネルギーが維新と共に迸り出て、藩の求心力が弱まると、外国語学習と西洋文明を求めて、志を持った青年達は東京を目指した。

明治政府は西洋の学術を研究し、国家の用に供することを最重要とし、このための費用を惜しまなかった。学校制度は試行錯誤を繰り返し様々に変わり、明治初期の医学学校でもドイツ医学を急激に導入した他に例のない変革の時期であった。制度が変わる中では自由があり、混乱からはエネルギーを得て、八年間のドイツ人の教育に耐え、学生達のドイツ語のレベルは最高であったと思われる。川俣四男也らは基礎科学から徹しく教育を受け、貧しいながらも夢と希望のある学生生活ではなかったであろうか。卒業生には、医学教育、地方医学の振興等に貢献した者が多いが、このドイツ流教育の最高の結実は北里柴三郎のノーベル賞級の業績と考える。そして単なる研究のみではなく、血清療法を開発し、伝染病撲滅に献身してきた。

この時代を記したものとして『ベルツの日記』があるが、学生生活を克明に書き記した「佐々木日記」もまた貴重な資料と考え、敢えて多くを引用した。

江戸時代、烏山は水戸の文化圏であった。幕末に水戸および江戸で、第一級の師から当時の先端医学を学んだ四男也の父誠は、明治維新後、主流となるべき西洋医学修得のために、四人の息子達に外国語を学ばせた。誠の確かな見識により、知的レベルの高かった烏山の地から、その後多くの優れた医者が輩出することになった。因みに、英夫の娘婿（川井二）は大正十年、また長男（一郎）および次男（武郎）は大正十二年に各々東京帝国大学医学部を卒業した医学士である。また四男也の眼科は、次男進を経て現在もその子達男

に受け継がれている。

尚、筆者は四男也の直系の孫であること付記する。

謝辞

本稿作成に当たり、永年にわたり多くの資料のご提供並びに細部に亘りご指導下さった元新潟大学医学部小関恒雄先生、佐々木曠先生の講義ノート及び日記を快く閲覽させて頂き下さったお孫様の未亡人佐々木美智子様には深甚なる謝意を表します。

貴重な資料並びに文献を賜った明治製菓株式会社北里一郎会長、東京大学大学院医学系研究科・外科学専攻・耳鼻咽喉科学分野加我君孝教授、静岡県医師会大久保忠訓副会長、石島弘先生、中西淳朗先生、日本薬史学会末廣雅也理事、坂入英子様、川井一夫先生、群馬県立がんセンター澤田俊夫院長に衷心よりお礼申し上げます。

また調査並びにご教示を頂いた福井県文書館吉田主任、福井県立図書館牧田真理恵様、茨城県立図書館寺田雄一主任、文京区立真砂図書館岩村孝子様、東京歯科大学高梨恒一講師、神奈川歯科大学山田良広助教授、社団法人北里研究所大岩留意子様、岡田泰様、岡村哲夫様、五味淵達也様、柏倉捷子様、下尾崎瑛子様には厚くお礼申し上げます。

参考文献

(1) 小関恒雄 明治初期東京大学医学部卒業生動静一覽 (二) 日本

医学雑誌 第三十六卷 第三号 一九九〇年

(2) 渡辺重編『県外在住福井県人史』福井人協会一九二五年

(3) 川又誠等敬述『續瘍科秘録』常州本間氏自準亭葉版安政六年

(4) 石島弘『水戸藩医学史』べりかん社平成八年

(5) 沼尻源一郎『水戸の洋学』柏書房一九七七年

(6) 伊東榮『伊東玄朴傳』玄文社大正五年

(7) 『東京大学医学部百年史』東京大学出版会昭和四十二年

(8) 多田建次 横浜高島学校の研究 『福沢諭吉年鑑』一九八〇年 年版

(9) 『横浜毎日新聞が語る明治の横浜』第三集(明治七年) 横浜開港資料館

(10) 草野武一『川俣英夫先生傳』栃木県立烏山中学校 昭和十六年

(11) 河本重次郎『回顧録』東京帝國大學醫學部眼科教室 河本先生喜寿祝賀会昭和十一年

(12) 大谷彬亮『醫者大谷周庵』自刊 昭和十年

(13) 宮島幹之助編『北里柴三郎傳』北里研究所昭和八年

(14) 山崎一穎『森鷗外その文学の時空間』日本放送出版協会 一九七七年

(15) 開国百年記念文化事業会編『明治文化史』第五卷 學術編 洋々社 昭和二十九年

(16) 宮永孝『日独文化人物交流史』ドイツ事始め』三修社 一九九三年

(17) 山下英一『グリフィスと福井』福井県郷土誌懇談会 昭和五十四年

- (18) 『東京帝國大學五十年史』上冊 東京帝國大學 昭和七年
- (19) 小関恒雄 明治初期東京大學医学部卒業生動靜一覽(一) 日本
医学雑誌 第三十三卷 第三号 昭和六十二年
- (20) 『北里柴三郎記念館』 北里学園 昭和六十二年
- (21) トスカ・ヘゼキール 北村智明、小関恒雄訳 『明治初期御雇医
師夫妻の生活』玄同社一九八七年
- (22) 『東京大学百年史』 部局史二 東京大学出版会 昭和六十二
年
- (23) 石橋長英、小川鼎三 『お雇い外国人』⑨医学 鹿島出版会 昭
和五十四年
- (24) 酒井シヅ 『日本の医療史』東京書籍 昭和五十七年
- (25) 根本曾代子 『日本の薬学』南山堂一九八一年
- (26) 『新潟大学医学部七十五年史』新潟大学医学部学士会 一九九
四年
- (27) 『海軍軍醫会五十年史』海軍軍醫会 昭和七年
- (28) 三國政吉 『日本眼科と新潟』新潟大学眼科教室同窓会 一九七
二年
- (29) 江口渙 『少年時代』光和堂一九七五年
- (30) 小関恒雄 『明治法医学編年資料断章』玄同社 一九九五年
- (31) 但し、『川侯英夫先生傳』には森有礼の検診(死)も行ったと
ある。
- (32) 東京医事新誌 五二八号広告 明治二十一年五月十二日
(かわまた あきお)